

豊田市
郷土資料館
だより
No.65

Toyota City Museum
Of
Local History



だるま窯(寿町)



目次

- ・特別展「茶と器 味・技・心の先駆者 パイオニア」…………… 2
- ・資料紹介「御茶銘附」六枚のお茶価格表 …………… 3
- ・神宝になった考古遺物 野見神社の巻 …………… 4
- ・埋蔵文化財調査速報 …………… 5
- ・新規事業「博学連携ノススメ」vol.2 …………… 6
- ・文化財シリーズ65・資料館NEWS …………… 8

茶と器

— 味・技・心の先駆者 —

パイオニア

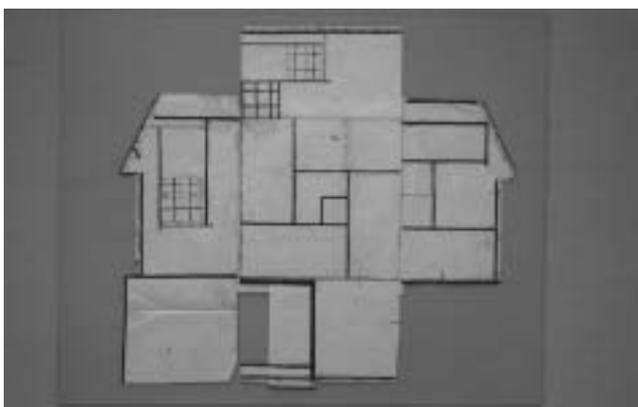


「日常茶飯事」という言葉があるように、私たちが毎日口にしていく「お茶」。「日本茶」「中国茶」「紅茶」など、様々なお茶が生活の中で楽しまれています。

あまり知られていないことですが、豊田市は茶と関わりが深い街です。明治時代以降、地場産業としての製茶が盛んになり、今でも、上郷地区・高岡地区・猿投地区・藤岡地区・下山地区で、「てん茶(抹茶の原料)」や「かぶせ茶」が生産されています。最近では、関西地区や全国の大会で毎年受賞者を輩出するほど高い評価を得ています。

展示の準備を始めた5月、取材のため、製茶農家の方が住んでおられる地区へ足を運び始めました。国道から外れて高台に上ると、一面に茶畑の爽快な風景が広がり、新鮮な驚きを感じました。ちょうどこの頃は新茶の収穫時で「座って食事をする間もない」ほどの忙しい時期であったにもかかわらず、組合長の清水さんはじめ皆さん丁寧にお茶の生産について教えて下さいました。初めて見る製茶工場に驚くと共に、ふるまっていたいただいたお茶が美味しかったことがきっかけとなり、「お茶農家をめぐるツアー」(11月12日実施予定)という企画が誕生しました。

展示の調査を進めていく中で、新しい発見もありました。江戸時代後期、豊田で初めて製茶を手掛けた豪商 寺田家の資料は、今回の見どころの一つです。製茶に関わる記録と共に、茶人として著名であった渡邊又日庵や八橋売茶翁との関わりを示す資料が見出されています。また、茶会や茶道具の記録、変わったものでは、茶室の設計図「茶室起し絵図」などもあります。単に茶を生産するだけではなく、茶道に精通した上で「茶作り」に取り組んだことを想像させます。



茶室起し絵図

お茶作りは山間部でも行われていました。足助で飲まれている「寒茶」は、大寒(1月20日頃)に作られる「パンチャ(番茶・晩茶)」の一種です。蒸した葉を乾燥させたものを湯に長時間浸して飲むもので、日本における茶の最も古い姿の一つと考えられています。寒茶作りは、地域や家によって作り方にいろいろ違いがあるようです。作り方を今に伝える人は随分少なくなってきており、今後、早急に聞き取り調査を進めていく必要を痛感しました。

茶が生み出した文化の一つに陶芸があります。愛知県・岐阜県で生産された、釉薬の掛かったうつわである「緑釉陶器」や「古瀬戸」は、日本における「喫茶のうつわ」の先駆けとなり、後に、華麗な桃山茶陶に代表される近世陶器を生み出す源流となりました。展示では窯跡から出土した茶の器から、製作技術の移り変わりをたどります。

また、茶を愛する人々によって現代まで伝えられてきた日本・朝鮮半島・中国・東南アジアの「茶の器」の名品も数多く陳列されます。それらからは、人々が茶に寄せた「心」の移り変わりを見ることができます。

本展では「茶の生産」、「茶の器を生み出す技」、そして「喫茶を愛する心」を主題とし、愛蔵されてきた陶磁器、遺跡からの出土品、民具、絵画、古文書など幅広い作品と資料を展覧し、「茶」の魅力について紹介します。実際に、抹茶や寒茶などの「とよたのお茶」を飲むことができるコーナーも用意しています。秋の行楽シーズン、ぜひ郷土資料館に足を運んでください。

(高橋健太郎)



黒楽茶碗 銘「黒面翁」(出光美術館)

「御茶銘価附」六枚のお茶価格表



た茶銘は、その茶が生産された茶園・土地の名前からつけられています。しかし宇治池尾村「喜撰」のように茶名が有名になると別の産地のものでも、その名が付けられるようになりさらにこうしたものと区別するた

11月1日～12月14日に開催される特別展「茶と器—^{パイオニア}味・技・心の先駆者—」にて展示紹介される資料に江戸時代のお茶店が出した茶の銘柄とその値段が一覧表になった資料があります。江戸時代後期に花園村（豊田市花園町）で茶製造をはじめた家に残されたもので、店の違うものが6枚あります。尾張国名古屋城下の店のもの3点、「松柏園 升屋半三郎製」「美濃屋和兵衛」「松楓亭 松本屋重兵衛」、三河国碧海郡高取村（高浜市）の「鷹溪茶屋 兵藤菊助製」、岡崎傳馬町の「煮雪軒 塗物屋和助」そして場所の不明な「山上善太夫」のもので

お茶は濃茶、薄茶、煎茶の順にかかれ、右から順に値段の高いものとなっています。濃茶は「半一袋」(10匁、37.5g)ごとの値段、薄茶、煎茶は一斤(600g)ごとの値段です。抹茶ははじめ品質による区分で「極上」「別儀」「極揃」「別儀揃」「上揃」などと呼ばれていましたが、その後、茶席で使用する濃茶に茶人や武士が銘をつけたことから「初昔」「後昔」「祝の白」「柳の白」などと呼ばれるようになりました。しかし薄茶は従来通り品質による区分で売られています。

それぞれの年代が不明なので正確な比較はできませんが、たとえば濃茶「初昔」は6枚のうち4枚が7匁5分で、同一銘柄は同じ値段です。また名古屋の松柏園と高取村の「鷹溪茶屋」は濃茶と薄茶の品揃えと値段がほぼ同じです。これは茶の販売の統制がなされていたからでしょう。仕入れ元が同じ問屋ということが考えられます。

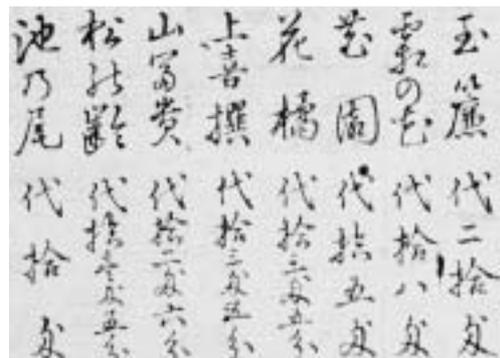
さてここに記載されたお茶はこの茶でしょうか。「池の尾」「喜撰」など宇治茶の名前がいくつか見られます。煎茶の「池の尾」「喜撰」「山吹」「雁音」「一ツ森」といっ

めに本場の「喜撰」には「正喜撰」と名づけられたりしています。また幕末の狂歌に「正喜撰たつた四杯で夜も寝られず」と嘉永6年(1853)アメリカの黒船四艘が浦賀沖に来航し、江戸の町が大混乱した様子を詠んだものがあります。この狂歌は非常に有名ですが、一般の人々がすぐにこれを理解できたのは、この茶銘が一般的であったからでしょう。

「挽茶要用控」(『升半茶店史 資料編』)に「煎茶之儀 宇治八勿論、勢州二而八川上野尻日内辺、江州八信楽^(出陣)政所、或八濃州今須関ヶ原辺并笹洞伊尾、其余場所違ひ二而も、都而宇治製之蒸焙二仕上ケ申候」とあり、他の産地の茶であっても、製法において宇治であれば宇治茶と呼んでいたといった状況があったと推察されます。こうしたことから、ここに記載されたお茶の産地ははっきりとはわかりません。

さて今回展示紹介する資料の「山上善太夫」店の煎茶覧に、花園村で製造されたと思われる煎茶「花園」という茶銘が出てきます。もしかしたら他にもこの地域で生産された茶があるかもしれません。江戸時代においても「とよた茶」が宇治茶と肩を並べて販売されていたのは、とよた茶の歴史において特筆すべき事項です。

(伊藤智子)



神宝になった考古遺物

—野見神社の巻—

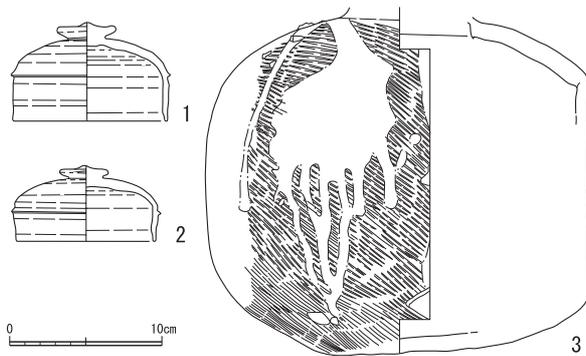
豊田スタジアムの南東2.5kmの矢作川東岸には、野見山が美しい姿を見せています。その山頂に鎮座するのが、延喜式内社の野見神社です。祭神である野見宿禰は相撲の神様として有名ですが、皇后日葉酢媛命が亡くなった際、殉死に代えて埴輪をつくることを提案し、土師臣の姓を与えられたことでも知られています。

この神社に伝わる神宝で、現在は豊田市郷土資料館に寄託されている資料の中に、古墳時代の須恵器3点（横瓶1・高杯ふた2）があります。横瓶(3)は、口を欠いていますが、俵に似た特徴的な形です。ふた(1)は口縁部が長く、一見非常に古く見えますが、口縁端部の特徴などを見るとおそらく6世紀前葉頃の資料と考えて良いでしょう。

横瓶が集落から出土することは少ないため、古墳からの出土品と思われれます。6世紀前葉は横穴式石室が普及する以前で、古



野見神社



野見神社神宝の須恵器実測図(1/5)



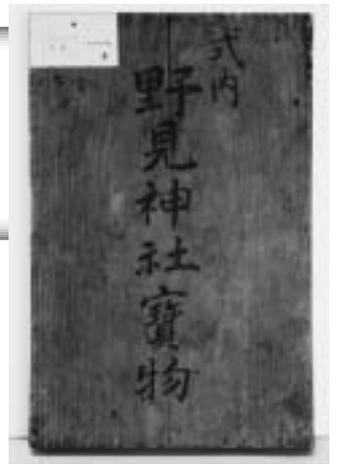
野見神社神宝の須恵器

墳は未だ数が少なく、大変貴重な資料となります。どこから出土したのかが、大変気になるところです。

さて、この須恵器は昭和31年刊の『拳母市史資料』に写真が掲載されており、「三つ塚より発見」と記されています。「三つ塚」の位置を記した写真は、神社の北西500mに位置する丸根城付近を示しています。また、昭和60年刊の『高橋村誌』では、丸根城二の丸に三つ塚と呼ぶ古墳があり、築城の際に破壊され出土したものが、野見神社に伝わったと推定しています。

一方、昭和32年刊の『たかはし夜咄』には、「野見にも三つ塚という小字に土師塚というものがある。おそらく野見宿禰の側近者を葬った処だろうといわれている。」との文章があります。現在、丸根城の北東400mあたりの墓地に「土師塚」と彫られた碑があり、旧字名は厳密には三つ塚ではないものの、その南西に近接した地点にあります。碑はより低い段丘面の水田地帯を見下ろす台地肩部にあり、古墳があっても不思議ではない地形です。想像するに、かつてここに古墳があり、それを壊した際に須恵器が出土、村人たちは見たこともない古そうな土器は、土師臣である野見宿禰に関係があるに違いないと考え、これを「土師塚」と名づけたのではないのでしょうか。

三つ塚＝丸根城説の具体的な根拠は、現在では不明です。地名から考えれば、現在の土師塚の碑の立つ位置も、野見神社神宝の須恵器出土地点の有力な候補地の1つと言えるでしょう。（森 泰通）



須恵器が納められていた箱



「土師塚」の碑



野見神社と関連遺跡位置図(1/25,000)



どうたくん

埋蔵文化財調査速報



すえちゃん

稲荷塚古墳〔下林町1丁目〕

稲荷塚古墳は市内でも数少ない埴輪が出土する古墳として知られています。古墳のすぐ南西の区画で住宅地の造成工事が予定され、今回はそれに先立っての調査で、34㎡を発掘しました。この調査区では古墳の周濠が見つかることが期待されましたが、埴輪の破片が出土したものの、見つかったのは中世の土坑や溝でした。この調査から古墳周辺に中世の集落が埋没している可能性が考えられます。



〔溝遺構とその断面〕

拳母城（七州城）跡〔小坂本町8丁目〕

今回の調査地点は拳母城（七州城）の城域の南東端にあたり、住宅地の造成工事に先立って124㎡を調査しました。この区画は城下から大手門に向う御殿坂に面した所で、絵図などの資料から〔勘定方役所跡〕と考えられていた場所でしたが、調査では土坑・柱穴・溝状の窪みなどが分かり、江戸時代後期～明治期の生活の痕跡の遺構と判断されましたが、いずれも役所跡に関係した遺構と考えられる材料は希薄でした。出土遺物はおもに江戸時代の陶磁器類や瓦片で、このほかに古代の須恵器片や近現代の陶磁器類もみられました。

また、この調査に続いて近接した区画において10月には集合住宅の建設に伴う調査を行っています。この地点は七州城内の唯一の大きな通りである広小路の端付近に相当します。



〔七州城跡の調査状況〕

千石遺跡〔上野町1丁目〕

寺部土地区画整理事業に先立ち調査を行っています。千石遺跡は1997年に豊田北高校の南側の地点2,100㎡を調査し、奈良時代の竪穴住居や中世の土坑などが分かっています。今回の調査区は豊田北高校の北東約200mの地点で、約9,000㎡を調査しています。ここは台地から沖積地へ地形が変わる地点にあたり、昔の川の跡や岸边にあたる場所などが分かり、平安時代の墨書のある灰釉陶器などが多数出土しています。



〔千石遺跡の調査状況〕

（杉浦 裕幸）



1. 博学連携とスクールサポート

豊田市郷土資料館では、博学連携の推進事業として「スクールサポート」を新規事業として立ち上げました。昨年度までも「出前講座」や「見学の受け入れ」などを積極的に行ってききましたが、今年度からは、学校教育の授業に対するサポート体制の整備とサポート内容の周知の強化に力を入れ、事業名を「スクールサポート」として新たにスタートさせました。サポート内容は以下の3点です。

- (1) 出前授業サポート
- (2) 資料館・遺跡見学サポート
- (3) 教材貸し出しサポート

2. スクールサポートの必要性

(1) 学校現場からの要請

今までにも「社会科の授業で縄文土器にふれさせたい」「文書や古絵図から学区の歴史を学び取らせたい」「明治時代の学区の様子を知りたい」など学校現場からの要望は寄せられてきました。実際に授業で困っている先生方も多くみえるようです。

(現場の先生談)

〈豊田市郷土資料館への要望〉

- 1位 「貸し出し実物教材のリストをつくる」 =57.8%
- 2位 「展示だけでなく、総合的に学習で使える博物館をつくる」 =55.4%
- 2位 「出前授業の機会を増やす」 =55.4%
- 4位 「学習プログラムをつくる」 =39.8%

(豊田市内の学校現場へのアンケート結果)

このように、学校現場が豊田市郷土資料館に対してサポートを求めてきていることは明らかです。

(2) 学習指導要領改訂に伴う要請

平成20年3月の学習指導要領改訂における教育内容の改善事項に「伝統や文化に関する教育の充実」が大きく取り上げられました。また小学校指導要領解説社会科編には「地域の博物館や郷土資料館などの学芸員から話を聞くことは、歴史的事

象を具体的に理解する上で有効な学習である」と明記され、豊田市郷土資料館の役割は非常に重要となりつつあります。

(3) 教育行政計画の推進

豊田市教育行政計画における基本目標の一つである「創造的な文化活動の推進と地域固有の歴史・文化の継承・発展」の実現のために、学校教育において、郷土の歴史への理解の促進は重要な課題となっています。

以上のように多面的な要請を考慮に入れると、郷土資料館が学校教育に対するサポートを行う必要性を強く感じます。

2. ホームページの活用によるサポートの推進

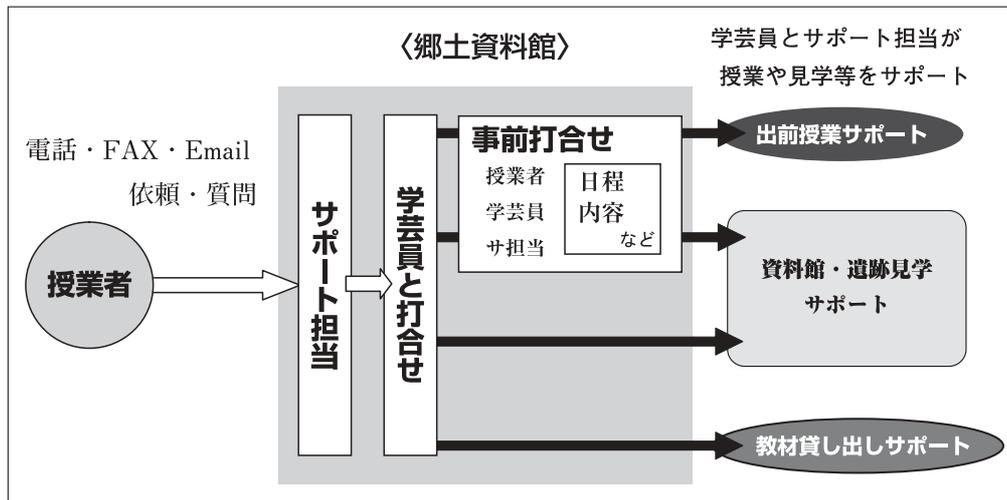
「スクールサポート」を多くの先生方に知っていただくために、豊田市郷土資料館のHPに「スクールサポート」のページを追加しました。さらに豊田市教育センターのHPからもこのページに入ることができるようにしたため、市内の学校からの問い合わせも増えています。10月現在、郷土資料館の学校教育における利用状況は、昨年と同時期と比べて1.5倍に増加しました。

- 出前授業サポート 23校
- 資料館・遺跡見学サポート 43校



http://www.toyota-rekihaku.com/school_support/index.html

サポートまでの手順とサポート体制の整備



また、サポート体制の整備をすすめるとともに、サポートを希望する先生方が、どのような手順でサポートを受けることができるかを明確化しました。このことにより、学校現場の先生方が依頼や相談をしやすいことができました。

3. 藤岡中学校1年生8クラスへのサポート

「歴史の扉・豊田ミステリーツアー」

中学生の歴史学習を対象に、本物資料から歴史の楽しさを体験する学習プログラム「歴史の扉・豊田ミステリーツアー」を実践しました。これは、藤岡中学校の社会科の先生方と共同企画した全く新しい学習形態のプログラムです。まず出前授業を事前に行い、写真資料をもとに中学1年生の生徒たちに「豊田の歴史ミステリー」(課題)を投げかけ、教室での調べや討論を促しました。一週間後、ミステリーに関わる4つの遺跡や資料館を訪問して、自らの目で課題を解決していくというツアーを実施しました。

- (1)期 日 平成20年7月3日(木)
- (2)対 象 藤岡中学校1年生8クラス(274名)
- (3)訪問先
 - ①百々貯木場
 - ②曾根遺跡・八柱社古墳
 - ③豊田市郷土資料館
 - ④豊田市近代の産業とくらし発見館

中学生は2クラスずつ4つのグループに分かれ、これらの遺跡や資料館をバスで訪問しました。資料館の学芸員は、訪問先に出向き生徒たちの対応です。

生徒たちは現地の状況や本物資料を目の当たりにすることで、予想や議論から生まれた疑問を郷土資料館の学芸員に質問し、考えを深め、解決し

ていくことができました。

(4)成果(藤岡中より)

本物資料に出会い、課題を追究する学習プログラムを実施することで、

- ①積極的に自ら求め学ぶ生徒の姿がみられた。
- ②自分なりの考えをもち、資料の裏付をもとに筋道をたてて理解しようとする生徒が見られるようになった。
- ③不思議に思ったり、疑問に思ったりしたことを解決するには、どのようにすればよいのか課題解決の方法を学ぶことができた。
- ④本物資料を活用することによって、資料を見つめる目を養うことができた。さらに、その資料の背景や関係するもの・人にまで思考を広げることができた。

(5)今後の改善点

- ①中学生に投げかける課題＝「豊田の歴史ミステリー」の再検討
- ②地域性を重視した体系的学習プログラムの作成
- ③交通手段の確保



百々貯木場で学芸員に質問する中学生

(伊藤俊満)

文化財シリーズ



大沼雅楽
豊田市指定無形民俗文化財

大沼雅楽は、明治26年(1893)5月、大沼の近藤正五郎、内田宗七、内田大三郎の三名が、岡崎大樹寺の雅楽人から免許を受けて師範となり、小島長三郎はじめ九名の有志が雅楽を習得したことに始まります。ここに大沼雅楽会が発足しました。

大正3年(1914)には、名古屋市小出来町に住む東照宮楽人佐藤慶治郎氏から舞楽を伝授されました。昭和7年(1932)7月、水害により衣装・楽器など大半を失って危機に直面しましたが、その後地元の人の熱心な活動により受け継がれています。

伝承者は、地元の成人で組織される大沼雅楽会と大沼雅楽クラブ(大沼小学校)です。神社の祭礼、寺院の法要、諸記念行事で、また依頼があれば福祉施設などでも上演しています。今年度は、愛知県の民

俗芸能感動体験ゆめ授業に参加し、地元大沼小学校の全校児童に演奏披露と楽器体験を行うことで、後継者育成と伝統文化の一層の発展に努めています。

〈演奏曲目〉
越天楽、抜頭、賀殿、浦安の舞、乙女の舞など

〈演奏衣装〉

楽人—烏帽子、狩衣、袴、白足袋

〈楽器〉

龍笛、楽太鼓、鉦鼓、笙、羯鼓、ひちりき

笏拍子、鉦鈴

〈楽 器〉

龍笛、楽太鼓、鉦鼓、笙、羯鼓、ひちりき

笏拍子、鉦鈴



管理者：大沼雅楽会

資料館NEWS

夏休み子ども月間

7月19日(土)から8月31日(日)まで「夏休み子ども月間」を開催しました。



▲勾玉づくり



▲土偶づくり



▲古代布づくり

ものづくりや史跡めぐりなどの講座では、夏休みを利用して、多くの市民の方が参加して歴史にふれていただきました。

郷土資料館 特別展「茶と器—味・技・心の先駆者—」

11月1日(土)から12月14日(日)

豊田市は茶とかわりの深い街です。明治時代以降、地場産業としての製茶が盛んになりました。

本展では「茶の生産」「茶の器を生み出す技」「喫茶を愛する心」を主題とし、「茶」の魅力に迫ります。

発見館 企画展「橋のある風景～矢作川をわたる～」

10月21日(火)から12月21日(日)

交通の近代化を担った「橋」に注目し、橋の構造をはじめ、矢作川やその支流に架かる特徴的な橋を紹介します。



▲ウルシゼ橋

利用案内

開館時間 9:00～17:00

休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館)、年末年始

入場料 無料(特別展開催中は有料)

交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分

名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分

愛知環状鉄道「新豊田駅」より北へ 徒歩15分

駐車場 約20台

■豊田市郷土資料館だより No.65■

平成20年11月20日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎(0565)32-6561 FAX(0565)34-0095

E-mail: rekihaku@city.toyota.aichi.jp

URL: http://www.toyota-rekihaku.com

※豊田市郷土資料館だよりはHPでもご覧になれます。